

住民主導のまちづくりに向けて (後編)

～小さな拠点「きらめき広場・哲西」を中心に
～市町合併によるサービス低下を自分たちで守るNPO法人「きらめき広場」～
市町合併12年を経て

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 地域医療人材育成講座¹⁾ 哲西町診療所²⁾ NPO法人きらめき広場³⁾ 元哲西町長⁴⁾

佐藤勝^{1) 2) 3)} 深井正^{2) 3) 4)}

診療所探検隊—地域が医師を「育てる」

地域が医師を「育てる」ということでは、若い医師や医学生などに研修や実習をしに地域に来てもらい、現場で行政や住民、いろいろなスタッフ（もちろんNPO職員も）が教育し育てていくことのほか、哲西町地域では診療所医師などが学校で授業をしたり、哲西町診療所での職場体験、診療所探検隊などを催し地元の小中高生を「育て」ている。毎年行われる健康福祉まつりの中で実施する診療所探検隊（写真16、17）では、地元の子どもたちや若い親の世代にも、診療所や医療を身近に感じてもらい、さらに地元の地域医療の素晴らしさともに感じてもらい、地元の医療に興味を持ってもらっている。

内視鏡で壺の中にあるおもちゃを見せたり、「ケロちゃん救出大作戦！！」と称し、実際に胃内視鏡を操作してもらい、壺に落ちたケロちゃんを鉗子で救出したりしている。また、ダンボールで作った哲西診太郎くんが紙を食べたとの想定で、胃内視鏡と鉗子で胃から紙をとり出している。CT室では、断層の写真を見ながら「はてなボックス」の中身を当ててもらっている。アンパンマンなど当たると歓声があがる。高価な医療機器を使い、ある意味不謹慎であるが、「いつもの診療所と違い楽しく過ごせた」、「CTなど都会に負けないすごい機械があった」、と好評を得ている。

以前に無医町になった苦い経験から永続的に哲西の医療が守られるように、この中から医師・看護師を目



写真16 (上)、17 (下) 診療所探検隊

指す者が現れ、いずれ地元に戻り地元の医療を支えてくれたらという願いも込めて、一緒に楽しんでいる。というのも、哲西町地域でも過去40年間で7人ほどの医師を輩出しているが、実際には地元へ帰っておらず、哲西を支えているのは他県出身の医師であったこと（現在、新見市出身医師が1人赴任中）。また仮に1人の医師が20～30年赴任していたとしても、引退の時期には行政はまた、医師探しをしなければならなくなるからである。

やはり、地元へ愛着がある地元で育った人が少して

も地元に戻り、地元を支える（Uターン）のが本来の姿であるとする。もちろんそれだけではマンパワーの不足もあり、医学部の地域枠などの制度も必要であろうが、地域枠などの制度だけで国が医師に義務をつけて地域に行かせる（Iターン）だけでは、根本的な地域医療の問題の解決にはならないような気がする。

地域枠をはじめ、すべての学生や医師をはじめ医療関係者へ、地域医療の魅力ややり甲斐、地域の温かさを伝えていくことで地域医療マインドを育て、自ら進んで魅力ややり甲斐を持ちながら地域に赴いてくれることが大切であるが、筆者自身も哲西町の住民のひとりとしての立場から、20～30年後のこの地の医療の継続性を考えたとき、少しでも本来の姿に近づけるために自身で今できることは、地元子どもたちへの「医師としてできる教育」を通して哲西町地域の良さを地域子どもたちをはじめ、住民皆へ伝えることが本当に大切であると考えているからである。

「子育て広場」—NPO法人による「子育てサロン」から発展、全市に波及

「きらめき広場・哲西」には、平成27年に移転してきた認定こども園があるが、それ以前より「きらめき広場・哲西」内の子育て支援の機能をNPOきらめき広場によって充実させてきた経緯がある。現在、「哲西子育て広場」は0歳から小学校就学前の子どもとその保護者を対象とし、週3回開設している（写真18）。目的は保護者同士が集まり情報交換をする場、学習会などで育児などの学習する場、親子と一緒に集まり交流する場、子ども同士の関わりを作る場、園に入る前の友だちづくりの場、地域の人との関わりを作る場になることである。

この「子育て広場」は、NPOきらめき広場が平成18年に立ち上げた「きらりら子育てサロン」（幼稚園教諭や保育士経験者のボランティアによる。平成18年度は、独立行政法人福祉医療機構からの助成を得て、平成19年度からは自前で実施。最初月2回であったが、その後週3回実施）がもとになってできている。

「きらりら子育てサロン」が新見市内各地の保護者に評判がよく、後に新見市の全市で行う事業として採用され「子育て広場」が市内5か所に開設されること



写真18 子育て広場

となった。そこで「きらりら子育てサロン」に代わる形で「哲西子育て広場」ができ、現在は新見市からの委託を受けて、NPOきらめき広場が運営する形になっている。施設内の備品なども「きらりら子育てサロン」から引き続き使っている物も多い。この中で医師も参加し、乳幼児育児中の母親などに子どもの病気やケガや生活習慣の話をしている。

「きらりら子育てサロン」のように、NPOは新しい事業を試験的に行いやすいところが行政とは違うよいところである。行政では事業が失敗した場合も考えるためか、何かを試験的に行いにくいのだろう。「とりあえずやってみよう、だめならやめよう」の姿勢でNPOは行政にできないことを補っている。NPOきらめき広場が試験的に立ち上げた「きらりら子育てサロン」が先導的な役割を果たし、哲西以外の地域にも採用され市の事業として市内5か所に開設され、多様な子育て支援活動が広まってきた。NPOならではの挑戦的な事業の成功例だと言える。

さらに、病（後）児保育や保育所利用児が急に熱を出したなどで、緊急のお迎えが必要になった際などに、出向く子育て緊急応援隊のため、子育てサポーター養成講座を開設し、ボランティアスタッフの養成を行い、子育てサポーター協議会も発足、会員も25名。

生活支援・介護事業

県との協働事業で生活支援協力隊（平成28年2月現在20名）による「ちょっとした困り事生活支援」事

図3 ちょっとした困りごとと生活支援事業

お知らせ

いつまでも住み慣れた場所で、元気で暮らしていけるよう、地域の皆さんと共に相互の助け合いが出来るよう『ちょっとした困りごとの生活支援』事業を始めました。

地域有償ボランティア《きらめき生活支援協力隊》の募集をしています。

日々ちょっとした困りごとがある方を対象に、生活支援を希望される方・生活支援に協力して下さる方の登録を始めました。

特定非営利活動法人 NPO きらめき広場

生活支援希望対象者は
高齢者の方・障害者の方・独居老人・その他移動困難者の方です。

(利用単価)
1時間 600円

生活支援に協力して下さる方(資格は問いません)

(支援単価)
1時間 400円

ちょっとした困りごとの生活支援協力隊及び
支援を希望される方はお申し込み下さい。
申し込み先
NPO きらめき広場
電話 0867-94-2143

支援できる事、支援できないことの内容は、うらに記載しています。

岡山県備中県民局協働事業
ちょっとした困りごとの生活支援

「支援できることの内容について」

- ① 外出・通院の付き添い（タクシー等の同乗に限る）
 - ・一緒に歩いていく買い物や病院受診への付き添い。
 - ・一緒に遠方の買い物や病院受診にタクシーで移動し付き添う。
 - ② 部屋の掃除・洗濯・庭の掃除
 - ・室内の掃除（居住地内に限る。）
 - ・洗濯、洗濯物を干す、取り入れる、たたむ。
 - ・庭の草取りやごみ取り、家の周りの掃き掃除。
 - ・障子の張替、網戸の清掃。
 - ③ 買い物、薬の受け取り
 - ・欲しいものを頼んでの買い物、薬局や病院への薬の受け取りの付き添い。
 - ④ 食事の準備など（依頼会員宅内）
 - ・食材を自分で準備しての調理、片付けの手伝い。
 - ⑤ 身の回りの世話（身体に触れるような専門的な支援以外）
 - ・着替えや外出の準備。
 - ・衣替え。
 - ・ゴミ捨て、ゴミ出し、分別。
 - ・書類の代筆、役所等への手続き等の付き添い。
 - ・ストーブの出し入れ、灯油入れ。
 - ・電球や電池交換。
 - ⑥ 話し相手
 - ・1日につき1回まで（1時間以内）
 - ⑦ 安否確認
 - ・一日につき2回（訪問及び電話での確認）。
 - ⑧ そのほか事務局が認める支援
 - ①からのまでの支援以外で、依頼会員に必要と思われる支援。
- ※ 時間内であれば上記の①～⑧の支援を組み合わせることも可能です。



写真19 きらめき訪問介護事業所

業（図3）を開始したり、従来、土日祝日に受けられなかったホームヘルプサービスを提供するため、2級ヘルパー養成講座を開設したり、その後、きらめき訪問介護事業所を立ち上げ、訪問介護事業を開始した（写真19）。

このように哲西町地域においては市町合併後も、生活の基盤である医療（健康）が施策の中心に置かれ、各分野と情報の共有や事業の連携により地域包括ケアが推進され、NPOも含め多職種の人たちが同じ目的意識を持ち連携し事業に関わることで、住民に身近で適時適切できめ細やかなサービス提供につながっている。これらにより、住民意識にも変化が起り、住民皆で地域全体を支える体制につながってきている。

環境保全・都市農村交流・地域情報化

5. 環境保全事業

国指定天然記念物「鯉が窪湿原」保全ボランティア育成講座や「鯉が窪湿原」もっと知る集い、ゴミゼロ作戦、クリーン&グリーン作戦の実施団体への支援。

6. 都市農村交流事業

空き家対策、都市農村交流Tシャツ事業。空き家対策では、都市部の2軒目の住宅として、この地区の空き家を紹介する取り組みで、定住対策の一つである。

7. 地域情報化推進事業

ラストワンマイル活用研究やパソコン教室。

市立哲西図書館の運営

8. 公共施設の管理運営事業

従来行政が直接提供していた公共サービスの民間委託を受け、新見市立哲西図書館（蔵書7万5,818冊〔H28.4.1現在〕の中規模図書館）（写真20）の指定管

指定管理者 特定非営利活動法人 NPO きらめき広場
 指定管理期間 平成17年3月1日～30年3月31日
 蔵書数 75,818冊 (H28. 4. 1現在)



写真20 新見市立哲西図書館

理者として、管理運営を担っている。市町合併協議のなかで、午後7時までの開館が困難となり、サービス低下が明らかになったため、急遽市からNPOきらめき広場が委託を受けることとなり、午後7時までの開館を維持し、年中無休体制を確立した。

合併前、午前10時から午後7時であった開館時間が、閉館午後5時の新見市立新見市図書館に合わせることで2時間短くなり、その2時間が1日貸出数の25%を占めており、住民からもそれでは困るとの声があがり、致命的なサービス低下となることが判明した。市が経費をもってくれるのだから、NPOでやってみようということで、サービスの低下を回避するため、指定管理制度により運営委託を受け、公設民営となったものである。

その上、NPOきらめき広場が受託してからは木曜日の定休日を廃止し、年中無休のサービスを展開。さらに平成20年から午前9時から午後7時と、開館時間を延長して住民の便宜を図っている。また、新しいサービスとして乳幼児を持つ母親が来館しやすいように、月2回だけが乳幼児一時預かりサービスを元保育士の力を借りて開始した。最初は子守りを中心であったが、母親たちは本を読むより子育ての情報交換をしていたので、「そういうニーズがあるならそういう場にしよう」とボランティアを募って月2回の「きらりら子育てサロン」を始めることになった。その後週3回となり、そしてさらに「子育て広場」へ発展していった(前述)。

このように、行政では難しいと思われる柔軟な対応を行い、乳幼児を持つ母親の気軽な来館を支援している。図書館のレファレンスサービスに加え、「よろず



写真21 福祉有償移送サービス

相談室」を設けて市民に対する諸相談に対応するとともに、拠点施設の生涯学習センター部分の市民利用支援を行っている。市内外からの多くの利用で賑わいが創出されており、奉仕人口当たり県内トップの利用率、貸出数を誇っている。ちなみに、図書館運営の受託後、健康や医療関係の開架図書数を維持し、診療所の待ち時間中にも閲覧できるようポケットベルで呼び出す仕組みも残し、図書館利用者数が増えており、図書館はいろいろな人が集まる場で、地域包括ケアの面からも重要な機関となっている。

福祉有償運送

9. 福祉有償運送事業

平成18年改正され、自家用車でも非営利でなら有償運送が可能となった道路交通法に基づく有償の福祉移送・外出支援サービスや、同法改正により義務付けられた自家用車有償旅客運送事業に従事する者の国土交通省認定講習の実施組織の事務局を引き受けている。高齢化の進行とともに移動手段のない移動困難者が急増している現実に対応するため、平成18年から活動中。

単独で公共交通機関を利用することが困難な人に対し、寄付を受けた福祉車両を使い外出支援サービスを実施(写真21)。車両2台、現利用登録者159人、運転者13人(平成29年2月3日現在)、平成27年度299回/年移送、平成28年度422回/年移送。小さな拠点を交通結節点としている民間バス(市中心部とを結ぶ2往復)、市営バス(地域内3路線各4往復)、市福祉バス(市営バスの入らない地区に週1回)を補完する形で、移動困難者の個別輸送サービスに取り組んでいる。

2007年8月～(2016.3.31現在)
登録会員 327名
巡回回数 1,400回
走行キロ数 46,884km
乗車ボランティア 延2,555名
内容 広報と見守り活動



写真22 地域安全活動

地域安全活動

10. 地域安全活動事業

こどもの安全確保や地域の防犯・交通安全活動のために組織された「哲西地域安全会」活動を支援し、登録ボランティア335名（NPO協会会員でもある。平成29年2月3日現在）が毎日各地区で登下校の見守りをし、独立行政法人福祉医療機構の助成で整備した青色パトロールカーで巡回し、防犯活動、広報活動や高齢者の見守り訪問を実施中（写真22）。燃料経費はもちろん会費で自前負担。まさに「地域力」復活中。NPOきらめき広場では、その車の管理など、後方支援をするのが主な役割である。

後方支援に徹する理由

後方支援に徹するのは、一つには特定の人たちがまちづくりや地域の活動をやっても続かないと思うからである。まちづくりは、多くの人や組織が動いてはじめてできるもの。それに、小さな地域ではいくつもの団体を兼務してがんばっている住民も少なくないので、各組織が個々に重複した取り組みをすると、そういう熱心な人にしわ寄せが行くことがあるし、無駄な活動になってしまう可能性もある。個々の分野の分担組織が動きやすくなる総合調整役が必要なので、このNPOがその基盤をつくる機能を果たしているのである。

さまざまな団体の事務局機能を受けながら、そして事務機器などの実費貸し出しをしながら、さりげなく情報を集め、それを流して「あそこがこういうことをやろうとしているから、そちらでも手伝ってあげたら

どうか」と、連携を仕掛けることもある。結果として、住民にとってプラスになる環境の整備を図るわけである。後方支援に徹するもう一つの理由は、あるサービスを特定の組織が独占している場合、そこがやめてしまえばすべてがなくなってしまう。だからNPOきらめき広場では、あえてサービスを独占せずに、既存の組織があれば、そこを応援する形でやっている。いわば、リスク回避でもあるのだ。

NPOは臨機応変に

—住民の自治意識が高まる

サービスを行政が担うと、どうしても均一化せざるを得ない。しかし、サービスというのはそういうものではないだろう。道路や上下水道の整備、戸籍や住民票の管理などは効率化し、自治体の規模を大きくして行すべきであろうが、保健や医療や福祉、介護のサービスは必要ときに必要なものを臨機応変に提供し、そのニーズを大方の人の合意を得ながら充足させていかなければならない。これは、行政だけではできない、あるいは行政から少し離れなければできないものではないかとも考える。その典型が配食サービスである。

旧哲西町時代、町が75歳以上の高齢者に弁当を配るという事業を実施したことがあるが、行政が行うと元気高齢者を含め、全員に一律に配らざるを得ない。その結果、畑に出ている元気な高齢者がこれを受け取るために、自宅に一時戻らなければいけないというおかしな事態になった。こういう公共サービスが実に多い。行政でなく、NPOで行ってみるとそれがよくわかったのである。

長い行政主導の歴史の中で、サービス＝与えられるものというイメージができてしまった。しかし、その原資は自分たちが税金で負担しているということに多くの人が気づき、行政に対する目が厳しくなっている。そして今、自分たちで考えるべきだという雰囲気になってきている。この地域においても同様で、NPOができてから自治の意識が強まっていると感じている。普通は競争意識が悪いほうに出て、手柄の奪い合いになる。だが、哲西町地域ではそれが無い。それを証明するように、各組織間の連携がしやすくなっている。

以上、活動の一端を報告したが、複合施設「きらめ

き広場・哲西」が住民集いの場として機能しており、NPO法人もその中に間借りをしているが、保健・医療・福祉・介護・行政・教育・産業・文化・生活・市民レベルでのまちづくりなどがしっかりと連携が取れた状態で展開されており、図書館の年中無休体制と相まって、「市民みんなの家」という感覚で人々が集い、さまざまなきめ細やかで質の高いサービスを受けるとともに、市民自らもサービスの担い手として活動しようとしている。

住民サービスの充実したコンパクトシティ

このような「きらめき広場・哲西」を中心とした小さな拠点（コンパクトシティ）としての機能は、NPO活動も相まって、年間6万人程度の利用を誇り、

- ・施設づくりで培われた住民の参加意識の向上と地域の担い手意識の向上
- ・施設内の各セクションが物理的壁のない状態でつながったことから、セクション間の感覚的障壁も取り払われ、連携・連帯の一体感が醸成
- ・生活利便性の向上
- ・にぎわいの創出と併せて、利用者間の交流・地域連帯感の向上などの効果を地域に及ぼした。

これらの活動も評価され、平成21年農林水産省の山村振興事例集にて、また同年国土交通省の過疎集落研究会報告書で新たなサービス提供の例として、平成25年、国土交通省の小さな拠点づくりガイドブックに参考事例として、小さな拠点とNPOきらめき広場の活動が取りあげられた。また、平成28年10月には国土交通省の住民サービスの充実した模範的な道の駅として、全国6か所の1つにも選ばれた。

小さな拠点と周辺集落

NPOきらめき広場の活動拠点が、小さな拠点「きらめき広場・哲西」であると同様に、文化活動や趣味のサークルを含め、市民活動団体の大半がここを本拠地もしくは拠点として活動している。施設完成後16年近く経過し地域では、小さな拠点の存在がすでに当た

表6 課題と今後

- | |
|---|
| ① 会費収入・寄付金収入・事業収入など経常活動資金の確保による財政基盤の確立を図ること |
| ② 行政セクターや企業セクターなど互角に対応できる力量（NPO力）を蓄積すること |
| ③ 変化していく社会に適切に対応できる柔軟性・機動性・迅速性・先進性を高めること |
| ④ 公共を担う多様な市民セクターの充実と連携を図ること |
| ⑤ 何よりも、会員がミッションに対する情熱を燃やし続けること |

り前のこととなっているが、今、小さな拠点の一例として注目され、改めて「きらめき広場・哲西」が果たしてきた役割の大きさとその内包する力を再認識している。

しかし一方で、この「小さな拠点」は中心集落に立地しており、周辺の基礎的な集落、とりわけ辺縁部の集落のあり方が大きな課題となってくる。一極集中の進んだ現在の日本国土ミクロ版になっては、トータルとしての地域づくりは失敗と考え、NPOきらめき広場は、過疎高齢化が進行する集落をどう守っていくか、現状とその認識・将来の定住意向を含め、集落実態調査活動も展開中である。

地域の現状と将来の姿を居住者自身で確かめ、運命共同体としての基礎集落の姿を探り、住民自身が地域の仲間とともに手づくりで地域の未来を拓く、「住民の住民による住民のためのまちづくり」に発展させる予定である。

NPOの課題と今後

これからの社会では、きめ細やかな住民サービスを提供するための公共公益の担い手として、行政セクター・企業セクターに加え、市民セクターがたくさん立ち上がり連携していかなければ、多様化する社会ニーズを満たすことができる住みよい地域を造ることはできないだろう。

過疎地域においてはなおさらである。市民セクターの充実に向けてがんばっていきたくと考えているが、もちろん、NPO活動が進めば進むほど、さまざまな課題にも直面している（表6）。運営は会員による会費

(現在年6,000円。設立当初は1万2,000円)をベースに、民間助成事業の実施、個々の事業での行政の支援もある。とはいえ楽な運営ではない。最大の課題は経費の捻出。年間事業予算およそ2,500万円のうち、指定管理者の委託料を含め、収入は約2,000万円。現状では基金を取り崩している状況である。

そこで、各組織の事務局を数多く受託し、その委託料を増やすとともに、各種財団などからの助成金、行政からの事業委託も増やして基盤を安定させたい。市町合併時には3,200人を超えていた人口も、現在では2,500人強まで減少、高齢化率も43.5%となり、将来はもっと高くなる。かつては60人以上いた旧哲西町職員も、現在では新見市哲西支局として15人。その分NPOきらめき広場の存在意義も大きくなるし、活動の場も広がるだろうが、会員も協力会員も当然高齢化して活動が難しくなる。

今の若い世代の人たちが、自分たちが年をとったときに支援を受けることだけを考えると、この地域は潰れてしまう。そうではなくて、年をとっても自分たちが主役なんだから、働ける間は地域のために働くことに生き甲斐を見つけてもらおうと、結果的に元気に過ごせるだろう。その一方で、若い人たちが定着するよう、私たちが地域を支えている間になんとか次の施策を実現してほしいと考えている。

今のままではよくもっても10年から20年、その間に中長期の構想として、若い人たちが減った人口でこの地域をどのようにして守っていくのかに焦点を合わせて、新たな組み立てをしておく必要がある。人口減少への対応も若者の定住増が夢だが、限界に近づいていく時点を先に延ばしながら、人口が減っても動ける形を何とかつくりたい。それには自力だけでは無理だし、行政の支援も必ず必要になるだろう。

小さな自治の再構築

行政によって提供されてきた公共サービスが、市町村合併や自治体財政の縮小に伴い否応なしに低下し、その低下を少しでも自分たちで補おうと出発したNPO活動であったが、画一的で硬直化した行政機

能の現状や、行政サービスだけでは充足できない身近な生活関連のニーズに気付くとともに、行政サービスには多くの隙間が存在する実態も明らかにしてきた。

地域には地域らしいニーズがあり、それに対応するサービスも地域にふさわしい、より即応的・効果的・効率的な取り組みの必要性も痛感した。行政の代わりをするのでなく、隙間があれば自分たちでできる範囲で隙間を埋めていくことが、結果的によい地域づくりにもつながるのではないかと考える。

自分たちの地域は自分たちで守っていかなければ何も始まらない。自治を住民の手に取り戻す気持ちで。行政が引き受ける部分と本当に身近な住民自治を発揮していかなければならない部分をきっちり分けることも大切であろう。こうした動きを私たちは「小さな自治」の再構築と位置付け、さまざまな地域組織が思いを共有しつつあり、徐々に自治意識が育っていることを肌で感じる。

NPO 3団体の設立を支援したが、引き続き中間支援団体としての役割も果たし、公共を担うさまざまな団体・組織などの市民セクターを連携させて、それぞれが充実するお手伝いをし、できるだけ多くの市民や市民団体や市民組織が立ち上がり、ともに協働しながらまちづくりを進める姿を夢に描いている。

行政との関係では、行政が何でもNPOにやらせておけばいいとなったのではNPOの意義がないと考え、対等な関係を保つことを基本姿勢として、協働に名を借りた行政の下請けには絶対になってはならないという気構えで、主張すべきことは主張し、必要なお金は出してもらおう。行政が行う非効率なことを是正し、提案していくこともNPOの大事な役割であるとともに、行政を巻き込みながら、自ら主体的に協働した地域づくりを進めていきたい。

このNPOは、その自治、コミュニティの再構築の実験でもあるのかもしれない。「税金を投入し社会資本を充実させても、使う側の住民が元気でなければ使われず意味がない。地域包括ケアで病気を減らし、医療費も保険料も減らし、元気な人たちが増え、地域を愛してくれれば、それが財産になるだろう。そうすることが、このNPOのミッションだと考える。

それによって社会貢献できる組織、団体がたくさん育ってほしい。

まずは住民が自分たちにできることから、小さなことでもいい、ゆっくりでもいい。コツコツと絶え間なく実践していく。そうやっていく過程、あるいはその成果、またやり始めた勇氣から、そしてそれを繰り返して行うことで人々から感謝され、満足感や達成感を得、それが少しの自信と誇りになり、やり甲斐となり、地域へのさらなる愛着へとつながり、ひいては生き甲斐となっていく。そしてその輪が大きく広がっていけば、まちづくりを大きく変えていくことだろう。

これからも「小さな拠点」を拠り所として「小さな自治」への挑戦を続ける覚悟である。

●参考文献

- 1) 哲西町町民意識調査結果報告書, 1-75, 1997
- 2) 佐藤勝: 地域包括ケアのなかでの健康づくりー住民を中心とした多彩な取り組みー, 介護予防・健康づくりに挑戦! 第4回, 地域医療, vol.45, No.2, 36(172)-45(181), 全国国民健康保険診療施設協議会, 2007
- 3) 佐藤勝: <進言>, 地道なへき地医療活動→地域包括ケア→まちづくりへの展開, 厚生福祉, 5648号, 9, 時事通信社, 2009
- 4) 佐藤勝: 「へき地医療は楽しい~多くの人々仲間に支えられて~」, へき地の「いのち」を守り、育む。厚生労働, vol.163, No.6, 43, 財団法人厚生労働問題研究会・中央法規出版株式会社, 2008
- 5) 佐藤勝: へき地医療にはまっちゃった~地域包括ケア, まちづくりにつながる魅力とやり甲斐を感じながら~多くの人々仲間に支えられ~次世代に地域医療の楽しさを伝えたい, 自治医科大学医学部年報, 第38号, 51-54, 自治医科大学, 2010
- 6) 佐藤勝: 地域医療が要となった教育, 福祉と連携したまちづくり, 特集. 地域医療とまちづくり, 月刊地域医学, vol.26, No.1, 28-35, 公益社団法人地域医療振興協会, 2012
- 7) 小林敏行: 地域医療に生きる, シリーズ: 地球・この星の住民として, 特集近未来医療ー5年後の医療を探る, 無限大, No.123, 1-8, 日本IBM, 2008年夏
- 8) 佐藤勝: 第3章地域医療を实践するー隠岐の島・哲西町・地域医療教育, 岡山大学版教科書医学経済学・地域医療学, 71-116, 岡山大学出版会, 平成26年6月1日
- 9) 深井正: 寄稿「小さな拠点」きらめき広場・哲西の取組, 特集「集落と地域間交流」, 人と国土21, 第3巻第1号, 10-13, 国土計画協会, 2010年5月
- 10) 青山泰子: 岡山県新見市哲西町の取り組み, 地域医療を中心としたまちづくりの展開, 地域医療の展開と医療過疎, 高齢者の生活保障, 放送大学教材, 112-114, 財団法人放送大学教育振興会, 2011年3月20日
- 11) 中山間部への医療福祉サービスの提供 保健・医療・福祉・教育・文化等の機能が集約されたまちづくりの拠点運営 NPO法人きらめき広場/岡山県新見市, 山村の元気は、日本の元気, 山村振興事例集, 104, 農林水産省, 平成21年3月
- 12) 合併によるサービス低下を自分たちで守るNPO法人設立~行政・保健・医療・福祉・教育・文化一体の「きらめき広場」を核に~岡山県新見市哲西地区, 地域の鼓動・第28回, Aging&Health, 第17巻第4号, No.48, 36-39, 財団法人長寿科学振興財団, 2009冬
- 13) 深井正: 「きらめき広場・哲西」への想い, 建築技術, No.626, 42-43, 出版社建築技術, 2002年3月
- 14) 井ノ原勝, 堀田荏惟一: やわらかな集いのステーション, 建築技術, No.626, 48-51, 出版社建築技術, 2002年3月
- 15) 林理恵. ひろがるヒューマンネットワーク, 保健、医療、福祉が同じ屋根の下で連携, 地域包括ケアは信頼とネットワークづくりから 岡山県新見市哲西支局市民福祉課主任保健師吉岡キヨコさん, 公衆衛生情報, vol.36, No.12, 1-4, 財団法人日本公衆衛生協会, 2006年12月
- 16) 浮谷次郎: 診療所・庁舎・図書館等の複合施設を拠点に地域包括ケアを实践 岡山県新見市哲西町, ルポ地域医療の現場は今3, 特集・地域医療を守れるか, 月刊ガバナンス, No.77, 33-35, 株式会社ぎょうせい, 2007年9月
- 17) 徳田武: 合併によるサービス低下を防いで「地域自立」ー地域の各組織を横断的につなぎ、自治の基盤をつくるー岡山県新見市哲西地区のNPO「きらめき広場」の場合, 取材part3, 公衆衛生情報, vol.37, No.10, 16-19, 財団法人日本公衆衛生協会, 2007年10月
- 18) 食育推進モデル地区の取り組み 新見市哲西地区 NPOきらめき広場, 平成20年度地域食育推進活動事例集, 13-14, 岡山県保健福祉部健康対策課, 平成21年
- 19) 佐藤勝, 深井正, 奥津一富美, 村瀬奈美, 河村智子, 高尾順圭, 太田雅恵, 桑原ひとみ, 安陪こず恵, 高瀬佳子: 行政主導に頼らない住民主導のまちづくりー市町合併による行政サービス低下を危惧し設立されたNPOの活動-市町合併10年を経て~, 第55回全国国保地域医療学会特集号, 1160-1168, 公益社団法人全国国保健康保険診療施設協議会, 2016
- 20) 基礎的な生活サービスの確保, 過疎集落研究会報告書, 15-19, 国土交通省国土計画局, 平成21年4月
- 21) 佐藤勝: 「きらめき広場・哲西」から広がる健康づくり・地域包括ケア, From clinic, 病院, vol.70, No.10, 804, 医学書院, 2011年10月1日
- 22) 堀田荏惟一: きらめき広場・哲西・哲西町診療所/哲西町歯科診療所, 地域を支える診療所二題, アーキテクチャー保健・医療・福祉・第201回, 病院, vol.70, No.10, 802-805, 医学書院, 2011年10月1日
- 23) 岡山県新見市哲西地域『きらめき広場・哲西』・『道の駅・鯉が窪』道の駅に隣接して庁舎、診療所、図書館等を一体化した複合施設を整備. 9, 14, 17, 21, 22, 23, 40-41, 平成の合併後の旧町村エリアでの拠点づくりの事例, 「小さな拠点」づくりに向けて~事例から学ぶ~集落地域の大きな安心と希望をつなぐ「小さな拠点」づくりガイドブック~つながり、つづける地域づくりで集落再生~, 集落地域における「小さな拠点」形成推進に関する検討会, 国土交通省国土政策局総合計画課, 平成25年3月